

第4章 映像・アニメーション系列サブカルチャー教材化とその実践

第1節 映像を用いた国語教育—映画とテレビドラマの教材化

1 映像教材で育成する言語化能力

本章では、映像系列のサブカルチャー教材を取り上げる。インターネットの急速な普及によって、現代社会に生きる若い世代の学習者にとって、映像はもともと身近なメディアとなった。ことばよりも映像が先行する現代において、国語教育のあり方も見直される必要がある。なお、アニメーション教材に関しても「映像」のカテゴリーに加えて、本章において扱うことにする。

パーソナルコンピュータと携帯電話の普及により、映像がますます日常生活の中の身近な場所に浸透しつつある。パソコンや携帯電話のディスプレイを通して、常におびただしい量の映像情報が送信される今日、文字よりも映像が優位の社会環境の中で育った学習者を前にして、国語教育の在り方を大きく見直す必要も生じてきた。一方で、様々なメディアから際限もなく送り続けられる情報を的確に整理して、批判的に受け止めかつ取り入れる能力としてのメディア・リテラシーに関わる論議¹が、教育の現場でも活発になっている。本節ではメディア・リテラシーの問題を視野に収めつつ、映像を用いた国語教育の在り方について、特に学習者が強い関心を寄せるサブカルチャーの中から、映画とテレビドラマを選んで、教材化および授業構想についての提案を試みる。

国語教育で映像をどのように扱うかを検討する際に、まずは授業において育成する学力について明らかにする必要がある。そこで注目したいのは、序章第3節で取り上げた「言語化能力」である。

すでに紹介したように²、浜本純逸は『国語科教育論』（溪水社、1996. 8）において、「言語化能力」を「言語文化」「言語生活」「言語体系」の基盤にあってそれらを生み出し運用する人間固有の潜在的な能力であるとして、次のように述べている。

これからの国語科教育は、言語体系・言語生活・言語文化を生み出していく根底にある言語化能力に働きかけ、その能力を活性化し、より強力化していくことを目標とすべきであるということになる。

同書において浜本は、その目標を達成するためには、「言葉の生まれる場所に学習者を立たせ、言語化能力を目ざめさせ、豊かにしていくこと」が必要であるとして、「絵画・写真・テレビ・ビデオなどの映像を言葉化する表現活動をさせること」を提案した。

この指摘を受けて、映像を教材化する際に、「言語化能力」の育成という目標を授業の中心に位置付けることができる。映像から発信されるイメージやメッセージを、ことばによって理解しかつ表現するという活動を通して、「言語化能力」の育成を図ることが、授業の目標となる。

学習者を取り巻く様々な映像を教材化して、国語教育の現場に導入する試みは多い。ただし国語科の授業として成立させることは、決して容易なことではない。浜本純逸の言う「言語化能力」のより詳細な分析を含めた研究が求められる。

2 国語教育で映像を扱う意味

広義の映像には静止画像も含まれるということで、まず前章で取り上げた写真と図版について考えてみると、これらは古くから国語科の授業に導入されてきた。教科書には多くの図版が収録されているが、教科書の他に「国語便覧」を副読本として使用する現場が多い。特に古典（古文・漢文）の授業では作品の背景となった時代の風物として、動植物などの自然から建築、服飾、調度品などに至るまで、図版を参照することによって、古典作品に対する理解が深まる。さらに絵巻物などの図版を通して、当時の状況を具体的にイメージすることができる。古典に限らず現代文の教材においても、写真や図版の活用は映像で育った世代の学習者に適した方向と言えよう。

授業で映像を活用するための条件として、視聴覚教室を含めた教室のハード面の充実という点への配慮が必要になる。写真や図版をスライドやOHP、さらに書画カメラなどの提示装置によってクラス全体に紹介することができる。写真や図版の活用は、インターネットの普及によってさらに拡大される。普通教室にコンピュータを接続する端子の付いたディスプレイを設置して、授業中にインターネットの映像を提供できるような環境も整備されてきた。映像を用いた授業の前提として、このような教室環境の整備が必要となる。

映像を導入して効果的な授業を展開するためには、どのような授業を展開するのかという学びのプランをきめ細かく検討しなければならない。単なる映像の紹介に終始するような授業では、成果を期待することはできない。映像の使用を安易に考えずに、あくまでも一つの「教材」として、指導計画の中に明確に位置付ける必要がある。

まず何のために映像を使用するのかという、指導目標を明確にする。一つには、教材の理解を深めるための補助教材という方向が、映像の基本的な在り方である。作品に登場する風物や舞台となった場所の映像を紹介することによって、その作品の理解を深めることができる。たとえば軍記物に出てくる装束の映像を見ることによって、装束描写と登場人物の身分との関連を理解することができる。また近代文学の舞台となった場所の映像によって、作品への関心が喚起される。国語教育で映像を用いることの意味として、第一に教材の理解を補助するという役割を挙げることができる。

第二の点として、教材の理解を深めるだけでなく、学習者の興味・関心を喚起するという方向も映像の重要な役割となる。たとえば映画化された文学作品を鑑賞することによって、学習者はその作品に関心を抱く。原作のイメージが映像によって限定されるという問題点もあるわけだが、興味・関心の喚起という目標は、映像によって達成されることが多い。映画鑑賞会に文学作品が映画化されたものを選ぶと、必ずその原作を読む学習者が出る。映画によって原作への関心が高まり、原作を読むという活動につなげることができることから、主体的な読書への動機付けという観点から映像の意味を考えることができる。このような、興味・関心の喚起という方向は、国語教育で映像を扱うことの重要な意味となる。

さらに第三として、映像を補助教材ではなく本教材として活用するという方向性がある。たとえば絵や写真を見て文章物語を創作するという活動や、音楽だけで台詞のない映像に台詞を入れるという活動などが相当する。また映像を見て、その映像に関するテーマを設

定してディベートを展開する授業、映像を途中まで見てからその続きを考えるという授業など、映像自体を中心的な教材とした実践が工夫できる。補助教材としての位置に安住するのではなく、今後はこのような本教材としての方向性も積極的に開拓する必要がある。以下に、映像を本格的な教材として用いた具体例として映画とテレビドラマを取り上げて、「言語化能力」を育てるための授業構想について考えてみたい。

3 映画の教材化

映画は広く国語科の補助教材として用いられている。たとえば文学作品を扱った後で、その作品が映画化された映像を紹介するという方向である。背景となった場所の映像など、学習者の興味を引いて、学習した文学作品に対する関心が深まることは大切な効果となる。そこで次に、主教材として映画自体を教材とした授業について言及する。まず、国語科の教材として映画を用いる際に留意する必要があるのはたとえば次のような点である。

- ① 全編を上映する場合は特に、長さが短い映画。
- ② 人物や物語の設定が分かりやすく、それでいて想像する余地がある映画。

第一の点は特に重要で、全編を紹介する際にはその時間に配慮しなければならない。単に映画を上映するのみの授業は避けたい。この条件から、教材化できる作品は大きく限定される。そして第二の点は、あまり複雑な設定や前衛性を前面に出した作品は教材にはなりにくい。ストーリーの展開もすぐに理解できるようなものが好ましい。ただし、どこかに「謎」があるような作品であればなお好ましい。

映画教材の具体例としてわたくしが選んだのは、ジム・ヘンソン監督による映画「ストーリーテラー」である。このシリーズは、授業の趣旨に即した適切な教材となる。その中の第三話「兵士と死—ロシア民話より」を扱うことにする。「ストーリーテラー」は、まさにタイトルとなった物語の「語り部」が画面に登場して、ストーリーを語るという形態で進行する。長さの面からも全体が20分程度ということで、授業中に全編を放映することができる。授業は、この映画を鑑賞するところから出発する。古い映画ではあるが、SF Xを駆使した映像と、テレビゲームにも似た魅力あるストーリー展開は、学習者の関心を十分に引き付ける。

主人公の兵士は物乞いに施しをすることで得た様々な特性とアイテムを生かして、ある古城の中に入る。特に何でも中に入るという魔法の袋が重要な役割を担うことになる。そこにいた悪鬼と賭けをして大儲けをし、さらに新たなアイテムを手に入れる。それは水の入ったコップであったが、人の生と死を予測できるものであった。皇帝の命と引き換えに自らの命を差し出した兵士は、死と対峙することになる。

その全体の4分の3程度経過した場面で、映像を中断する。中断場面以前までのストーリーの展開を踏まえたうえで、その場面の続きを想像して、ストーリーテラーに代わって学習者に語らせるという課題を提示した。席の近くの者同士で若干の情報交換をしてから、何人かの学習者に代表して語らせてみる。聞いている側の学習者からは、適宜感想を発表させる。

子どもたちの語りを聞き、評価を実施した後で、実際の「ストーリーテラー」の映像の続きを鑑賞する。映画の結末はかなり込み入ったもので、多くの学習者の考えた結末を超

える意外性を帯びたものになっている。彼らには、自分の想像した結末との比較をさせながら鑑賞するように促す。

今回紹介したのは、特に絵や映像との関連から読み聞かせにつなげるという活動を重視した授業である。その目標は「楽しむ」ことに置く。幼時から映像と深く関わる子どもたちに対して、それを効果的に生かした授業構想によって、ことばに対する興味・関心を育てることにしたい。

4 テレビドラマの教材化

次に、学習者が好んで見るテレビドラマを、国語科の教材として活用することを考えることにしたい。具体的な教材となるのは、たとえば原作となった小説や、その脚本などが入手可能なものが理想的である。ノベライズされたものでもよい。日ごろ単に映像を眺めて楽しむテレビドラマの映像から、ことばを引き出すという活動を授業の中心とする。

具体例として、シナリオライター橋部敦子が脚本を担当した「僕の生きる道」³を取り上げる。なお、このテレビドラマのエンディングテーマは「世界に一つだけの花」という曲で、2003年にヒットしたことで知られる。テレビドラマも、人気俳優が演じたこともあって話題になったものである。内容は、高校の生物の教師中村秀雄が、突然不治の病で余命一年という宣告を受けたという設定で、残された時間を精一杯生きようとする主人公の「生」、および「愛」と「死」という普遍的なテーマを扱っている。

授業で紹介するのは、第6話で、主人公の中村先生が同僚のみどり先生にプロポーズをするという場면을軸にして展開する。中村先生は自分の病気のことをなかなか告白できないでいるが、彼の生きる「証し」をビデオカメラに収録していたのを偶然みどり先生が見て、真実を知ってしまう。ある夜、アパートの自室を訪れたみどり先生に、中村先生が思い切って病気のことを告白するという場面を中心にドラマの映像を紹介する。作品を構成する様々な要素が集中的に出てくる重要な場面である。

授業では、映像とノベライズされたストーリーをそれぞれ紹介することになるわけだが、それは次の四つの場面に区切ることができる。

- ① 病院の診察室 診察を受けながら、主治医の金田医師と話をする秀雄。
- ② 秀雄の部屋 ある夜部屋を訪れたみどりに、病気のことを告白する秀雄と、それを無視して新婚旅行の話をするみどり。
- ③ みどりの帰途 秀雄の部屋を出て、帰る道すがら秀雄のことを思うみどり。
- ④ 秀雄の部屋 みどりが去った後、ビデオを見られたことを知り、考えごとをする秀雄。

このような場面の設定について、あらかじめ説明を加えてから、ノベライズされたストーリーとドラマの映像とを、同時に紹介する。小説の表現が、大きく「描写」「叙述(説明)」「会話」に分かれることを説明してから、特に「描写」と「叙述」の箇所を注意して、映像がどのように言語化されているのかに注意させる。特に第三のシーンは、回想のシーンを含むことから、ノベライズも引用符を工夫するなどの特色が見られる。そして第四のシーンでは、主人公の内言、すなわち心の声とも言えるモノローグを含むが、そのモノローグ以外はすべて描写と叙述から構成され、会話は出てこない。そこで、ドラマの映像を見

たうえで、この第四のシーンのノベライズを試みるという活動を展開する。

授業では、学習者に表現をいろいろと工夫させる。個人レベルで創作したものは、グループを編成してグループレベルで内容を相互に確認し、評価する。そして特に工夫が見られた作品を、クラスレベルで発表し、全員で鑑賞し評価する。その後で、小泉すみれのノベライズを紹介して、学習者の作品との比較を試みる。

親しみのあるテレビドラマを文字に置き換えるという活動は、学習者の興味・関心、そして表現意欲を喚起することができる。さらに専門家のノベライズを参考にまとめるということから、まとめる際の方向が見えるという特色がある。興味・関心、そして表現意欲を喚起し、同時に表現方法が見えるということから、具体的な表現の成立が期待できる。それに学習者相互の評価も取り入れて、国語科の学びとして成立するように配慮する。この授業構想も、浜本が指摘した「言語化能力」の育成に関わるものとして、位置付けることができる。

5 総括と今後の課題

本項では、映画とテレビドラマの教材化に基づく国語科の授業構想を取り上げた。冒頭で言及したように、学習者をめぐる環境はますます映像文化が主流を占めるようになった。携帯電話すらも、単に通話をするためのツールに留まらず、映像を配信する多様な機能が付属したツールとして、若い世代の人たちに親しまれている。インターネットの普及も、多様な映像情報の発信に重要な役割を果たしている。

国語科は、言うまでもなくことばの学びを扱う教科である。ただし、メディア・リテラシーをもちからめて、映像との関連においてことばで表現するという活動を組織することには、重要な意味がある。映像からことばを引き出すという活動は、浜本純逸が指摘した「言語化能力」の育成に直接つながるものとして理解することができる。そしてこの「言語化能力」は、これからの時代に求められる大切な国語科の学力である。

本項では、映像の中から映画とテレビドラマとを取り上げて、具体的な授業の構想を紹介したわけだが、さらに多様な映像を教材化して、教室での実践を通してその意味を検証する必要がある。学習者にとってきわめて身近な場所にある映像は、国語教育の分野でももっと注目されてよい。今後さらに多くの授業構想を検討してみたい。

注

- 1 メディア・リテラシーと国語科の関連に関しては、第1章第2節で言及した。
- 2 「言語化能力」に関しては、序章第3節で取り上げた。
- 3 ノベライズを小泉すみれが担当して、単行本『僕の生きる道』（角川書店、2003.3）が刊行されている。授業ではこの本を教材化する。